



**Data**

監督・脚本：ピエトロ・マルチェッロ

原作：ジャック・ロンドン『マーティン・イーデン』（白水社刊）

出演：ルカ・マリネッリ/ジェシカ・クレッシー/デニーズ・サルディスコ/ヴィンチェンツォ・ネモラート/カルロ・チェッキ/マルコ・レオナルディ/ピエトロ・ラゲザ

## 👁️👁️ みどころ

あなたは、米国人作家・ジャック・ロンドンの『野生の呼び声』を知ってる？『マーティン・イーデン』を知ってる？もし知らないなら、本作は必見。

労働者階級の若者と良家の令嬢との身分違いの恋は、『タイタニック』（97年）が有名だが、19世紀の米国の物語の舞台を、20世紀のイタリアのナポリに移し替えた本作では、ナポリ生まれの新進監督ピエトロ・マルチェッロは、アナーキズム、ソーシャリズム、階級闘争 etc. 等の概念を多用し、個人と社会の在り方を鋭く問題提起しているから、本作は何かと難しい。

ちなみに、スペンサーの「社会進化論」って一体ナニ？身分違いの恋は成就しないもの。相場はそう決まっているが、独学で勉強し、原稿を送り続けた挙句、作家として成功すれば・・・？そう思わなくもないが、結果はやっぱり・・・。

—————\*—————\*—————\*—————\*—————\*—————\*—————\*—————\*—————\*

### ■□■ ジャック・ロンドンは『野生の呼び声』のみにあらず ■□■

あなたは、アメリカの作家・ジャック・ロンドンを知っている？また、彼の代表作とも言える『野生の呼び声』を知ってる？寡聞にして私は両者とも知らなかったが、今年4月5日にハリソン・フォード主演の『野生の呼び声』を観てそれをはじめて知った。同作を観ている限り、ジャック・ロンドンは少年向けの冒険小説家とだったが、本作のパンフレットを読むと、いやいや、さにあらず。1876年にサンフランシスコで生まれた彼は、工場労働者、アザラシ漁船の乗組員など多くの仕事に就いた後、『野生の呼び声』で一躍流行作家となり、アラスカの自然と生の過酷さを描いた短編や、海洋小説、ボクシング小説、SF小説など、多様な作品を発表した作家らしい。

2020年もノーベル賞の季節となり、受賞者予想では今年も村上春樹が3番手につけていたが、10月8日に、今年の受賞者は米国の詩人・グリユック氏と発表され、村上春

樹の受賞は今年もお預けとなった。秋の夜長、読書の秋。本作の公開とその鑑賞を機に、ジャック・ロンドンのそんな著作にも触れてみたいものだ。

## ■□■物語はそのまま。舞台を米国から伊へ。そんなの可能？■□■

ジャック・ロンドンの小説『マーティン・イーデン』は、船乗りマーティンが裕福な家の娘と出会い、新しい世界へと足を踏み入れる物語で、労働者階級から独学で作家を目指す若者の苦闘を描いた名作らしい。ところが、その原作を映画化し、マーティン・エデン役で主演したルカ・マリネリに、『ジョーカー』（19年）で主演した名優、ホアキン・フェニックスを押しつけて、2019年ベネチア映画祭の男優賞をもたらしたのは、1976年生まれのイタリア人監督、ピエトロ・マルチェロ。それについてはパンフレットをしっかりと読んでもらいたいが、19世紀のアメリカを舞台にしたジャック・ロンドンの自伝的小説を映画化するにあたって、ピエトロ監督は、大胆にも主人公の名前はそのまま、物語も基本的に原作通りとしながら、舞台を米国からイタリアのナポリへ移し替えることに。えっ、そんなことが可能なの？

ちなみに、ナポリはピエトロ監督が生まれ育った町で、彼は「若者が困難を克服し、知識を得ることで自分を解放し、前進するというストーリーに向いている町だ。」と考えたらしい。パンフレットにある「監督インタビュー」によれば、ピエトロ監督はドキュメンタリー作りからキャリアを始めたため、ドキュメンタリーで学んだものを生かして映画を作るのは、彼にとって自然なプロセスらしい。そのため、本作のチラシに「多様な記録映像を盛り込みながら、あえて厳密な時代設定を避けて時空を超えた普遍的な物語。」と書かれているとおり、近時の邦画には絶対に観られない、何とも不可思議な映像を次々と登場させている。最初のそれは、イタリアのアナーキストとして有名なエッリーコ・マラテスタの映像だが、これがわかる日本人はほとんどいないのでは・・・。

## ■□■スパンサーの社会進化論とは？知らないことだらけ！■□■

本作導入部は、ナポリの労働者地区で生まれたマーティンが船乗りとしてその日暮らしを送る中、偶然知り合った女性・マルグリータ（デニズ・サルディスコ）と一夜を過ごす物語。その翌日、マーティンは偶然暴漢に絡まれていた良家の子息アルトゥーロを助けたことから、そのお礼に彼の住むお屋敷に招かれ、アルトゥーロの姉エレナ・オルシーニ（ジェシカ・クレッシー）と知り合うことに。マーティンが美しいエレナに魅かれたのは当然だが、それと同時に、今まで見たこともなかったブルジョワ社会の文化と教養にも強く惹かれていくことに。

エレナの母親がマーティンをブルジョワ階級の食事に誘ったのは、「息子を助けてくれたお礼」と言うだけの意味だったが、そこでエレナと知り合い、本を借りたことをきっかけに、マーティンは読書にのめりこんでいった。しかし、それって一体何の意味があるの？マーティンの義兄は完全にそんな価値観だったが、マーティンは言葉や文法、そして文学

への関心がどんどん膨れ上がっていったらしい。そんなマーティンに対して、エレナは「あなたに必要なのは教育であり、学校に通いなおす必要がある。」と論じたが、それはマーティンにとってあまりにも非現実的な話だった。

根が真面目な(?) マーティンは高校の入学試験まで受けたが、そこでは「小学校の教養を身につける必要がある。」とボロクソ。ところが、そんなマーティンがある日、「俺は作家を目指す。」と決め、執筆した作品を次々と出版社に送り始めたからビックリ。その結果が、原稿の返送ばかりだったのは当然だ。しかし、さまざまな独学の中で彼がめぐりあったのが、ハーバード・スペンサーの「社会進化論」。日本の司法試験に合格し、シネマ本を50冊近く出版している私ですらそれは知らなかったものだ。ちなみに、ウィキペディアによれば、これは「19世紀に現れた、種は不変の存在ではなく進化する存在である」という生物学的な考え方と、政治体制は変わっていくという歴史哲学的な考えの二つが合流したものだと解説されているが、なるほど、なるほど。

冒頭に登場したアナーキスト、エッリーコ・マラテスタといい、導入部でマーティンがめぐり逢い、彼の思想に大きな影響を与えたスペンサーの「社会進化論」といい、本作の問題提起は私の知らないものばかりだ。

## ■□■労働者階級の若者と良家の子女との恋は?■□■

『タイタニック』でも労働者階級の若者ジャックは一目で良家の令嬢ローズに惚れてしまったが、それは本作も同じ。しかし、本作に見るエレナには、婚約者が留守の間に自らヌードになって、その絵を描いてほしいとねだったローズのような奔放さはない。ひたすら上昇志向を示すマーティンに対して、あくまで教育の重要性を論すだけだから、観客の目には身分を超えたこの2人の恋の展開にあまり面白味はない。もっとも、ある日屋敷を離れて二人きりで出かけた二人は抱擁を交わし、しっかり愛を確かめ合った(つまり、エッチを終えた)が、ピエトロ監督のその点の描き方はあくまでボンヤリ・・・。

他方、価値観が正反対の義兄と同居していたマーティンは、ある日その義兄と大喧嘩したため直ちに家を追い出されてしまったが、それを契機として女手一つで2人の子供を育てている心優しい女性マリア(カルメン・ポメッラ)の郊外の家を安く間借りすることができ、執筆にも集中することができるようになったから、かえってラッキー。そこで、マーティンは心機一転、「作家になるまでに2年間の猶予が欲しい。」と申し出たところ、エレナはそれを信じて待つことになったが、こんな二人の身分違いの恋の成否は・・・?

こんな場合、日本なら娘が変な影響を受けかねない男とそれ以上の交際を続けることを禁止するもの。たとえば、『戦争と人間(3部作)』(70・71・73年)(『シネマ5』173頁)第2部で吉永小百合が演じた五代家の次女順子が、山本圭扮する共産主義者の標耕平と交際していることを知った父親は、優しくも、しかしはっきりと二人の交際を禁止していた。しかし、個人主義がベースにある西洋ではそうではなく、『タイタニック』に観るローズの

両親が意外に寛容だったのと同じように、本作でも、エレナの両親はエレナがマーティンと付き合っていることに比較的寛容だ。もっとも、後述のように、新聞紙上でマーティンが社会主義の先導者のように書き立てられた後のオルシーニ家の食事会では、ついに価値観の相違が露呈し、マーティンは無然と席を立ち去ってしまったから、これにてマーティンとエレナの身分違いの恋もジ・エンド？その後、「僕が悪かった。」と泣きを入れるマーティンに対しても、エレナはハッキリと拒絶していたから、ああやっぱり？

## ■□■マーティンは社会主義者？個人主義者？■□■

私の司法試験の勉強は完全に独学だったが、マーティンの文学の勉強と、それに伴う哲学や思想の勉強も完全に独学。したがって、彼がエッリーコ・マラテスタのアナーキズムや、ハーバード・スペンサーの「社会進化論」をホントにどの程度理解していたのかは知る由もない。しかし、ある日エレナに会うためオルシーニ家のパーティーで出会った謎の老紳士ラス・ブリッセンデン（カルロ・チェッキ）はそんな彼の才能を見抜いたようだから、多分マーティンの勉強は本物だったのだろう。

ラスはマーティンに対して「雑誌への投稿で才能を無駄にするな。」と諭し、ある日連れて行った社会主義者の集会で、マーティンを壇上に立たせ、大いに議論をぶちまけさせたが、そこに見る彼の演説は？私には、それは通り一遍の社会主義者の主張ではなく、個人主義的なものと思えたから、会場から大いに反発されたのは当然。ところが、その直後の新聞では、そのマーティンが社会主義の先導者として顔写真入りで載せられていたからアレ・・・？これは一体どうなっているの？

パンフレットにある「監督インタビュー」で、ピエトロ監督は、「ジャック・ロンドンの原作は19世紀のアメリカが舞台ですが、なぜこれを、20世紀のナポリを舞台にしたのですか。」という質問に対して、「20世紀という時代は多くの劇的なことが起こり、現代に影響をもたらしている、僕らみんなにとって、とても重要な時代だ。この映画ではネオリベラリズム、ソーシャリズム、アナーキズム、インディヴィジュアリズムと言ったトピックを扱いながら、個人と社会、階級闘争、マスカルチャーの役割などを描いている。映画の冒頭、エッリーコ・マラテスタが出てくるアーカイブ映像を使っているけれど、それは僕にとって大切なことだった。彼はアナーキストの象徴だから。それにナポリに近いサンタ・マリア・カーブア・ヴェーテレの出身でもある。ナポリに関しては、僕の生まれ育った街で理想的な舞台だと思った。僕は前作もナポリで撮っているけれど、ナポリの人々は寛容で、歓迎してくれる。海もある。若者が困難を克服し、知識を得ることで自分を解放し、前進するというストーリーに向いている街だ。それにイタリアを舞台に、かつてパゾリーニやネオレアリズモの映画にあったような力強い、生き生きとした映画にしたいという思いもあった。」と答えている。

私は大学時代の学生運動の中で、マルクス、エンゲルスの本を読み、19世紀から20世紀にかけての「革命の時代」のヨーロッパの歴史、哲学、思想を勉強したから、この意

味が少し理解できる。しかし、今時のネットとスマホしか知らない大学生に、この監督の言葉がどの程度理解できるのだろうか。『タイタニック』に観るジャックとローズの恋模様の展開はわかりやすかったが、本作に観るマーティンとエレナの恋模様はかなりわかりにくい。そのうえ、ひたすら作家として認められることを願い、そのための必死の努力をしているマーティンが生きる19世紀のナポリを舞台とした世界は、さまざまな価値観が激突する激動の時代だったから、その理解も難しい。

しかし、少なくともマーティンは社会主義者ではなく個人主義者だったことはしっかり押さえたうえで、本作に登場する様々な概念や主義主張についてもしっかり整理したい。

## ■採用通知から大成功へ！しかし、幸せは？■

作家になるためには、とにかく原稿を認めてもらうことが出発点。しかし「下手な鉄砲も数撃てば当たる」というのは嘘で、下手な鉄砲はいくら打っても当たらないものだ。本作前半の展開を観ていると、それがよくわかる。ところがある日ついに……。それはそれで感動的な瞬間だが、一冊の本が世間に認められ、作家として有名になり、収入が増え、豪邸に住むようになると……。？現在私たちが知っている有名な作家はすべてこのプロセスを経て成功者になっているわけだが、それは本人が変わった結果なの？それとも世間が変わった結果なの？

やっとの思いで、あれほど待ち望んでいた成功（栄光）を手に入れたマーティンだったが、一方でエレナを失い、他方でラスも失ってしまったマーティンは、「俺は何も変わっていない！それなのになぜ？」、そんな疑問が解けないまま自堕落な生活を送っていた。ちなみに、パンフレットには、本物のジャック・ロンドンが「1916年に40歳で急死した。」とだけ書かれているが、「これはひょっとして自殺？」そう思っただけでウィキペディアを調べてみると、案の定、彼は自宅でモルヒネを飲んで自殺したそうだ。

本作はラストに向けて、成功者となったマーティンが講演会で講演する風景が描かれるが、そこでの彼の態度はハチャメチャ。また、アメリカ行きという大仕事に臨む風景も描かれるが、本人はそれに全然乗り気ではないようだ。ちなみに、ジャック・ロンドンが『野生の呼び声』を書いたのは1903年で27歳の時だから、本当に自分の冒険体験に基づき、自由奔放に筆が走っていた時期なのだろう。しかし、作家として成功を収めた1909年に『ジャック・ロンドンの自伝的物語』、『マーティン・イーデン』を書く頃になると……。

本作ラストに見るマーティンの終末期には、彼の講演会に聴衆の一人として出席したエレナが、「両親を捨て、もう一度マーティンとやり直したい。」と泣きついてくるストーリーが描かれるが、その姿は痛々しい。『タイタニック』に観た二人の恋の結末は、『ロミオとジュリエット』の悲恋の結末と同じように、悲しいけれども絵になるものだった。しかし、本作に見る二人の恋の結末は残念がらそうではなく、痛々しいだけだ。しかし、あれが現実なら、これも現実。しかして、本作ラストに見るナポリの海の風景は……？

2020（令和2）年10月12日記